

# 保育園保護者が認識する子育ての困難さと

## 親としての成長

### —保育園卒園児の保護者の振り返りを通して—

木村 たか子

1990年の「1, 57ショック」が起爆剤となって始まった「子育て支援」は保育所機能の充実、育児休暇等の労働環境改善、子育てサロンや広場等の子育て家庭支援等広がりをもって行われてきた。現在では子育てをする母親が感じる育児負担感や育児不安の様相も明らかにされてきた。また、子育ては子が育つだけの意味ではなく、子育てをすることで親も変化し「親としての成長」していくのではないかとの考えを基礎に、子育てについての具体的な支援だけではなく、「親としての成長」を支えるための支援という概念が一般的になっている。

では、「親としての成長」とはどのようなことを言うのであろうか。柏木恵子(1994)<sup>1</sup>は、親の成長・発達の因子を「柔軟さ」「自己抑制」「運命・信仰・伝統の受容」「視野の広がり」「生き甲斐・存在感」「自己の強さ」とした。原田正文(2006)<sup>2</sup>は①人の表面的言動のバックにあるものを理解し、人の気持ちを感じ取り、共感する能力②物事を多面的にみる能力即ち見る角度によって、絶対の正義も絶対の悪もなくなり、物事は幾様にも見えてくるということを理解し、物事の判断にあたってバランスをとることができる力をあげている。鯨岡峻(2002)<sup>3</sup>は親になることを関係性の視点から親になるということは「育てられる者」から「育てる者」へという立場の転換であり、コペルニクスの転回といっても過言ではないほどの生き方の一大転換だとしている。そしてこの立場の転換を認識することはこれまでの価値観を覆す大きな困難が伴うとしている。岩本純子(2008)<sup>4</sup>は子育てを通して親は①時間的な視野、人間関係の視野が広がる②曖昧な状態・不完全な状態に耐えられるようになる③自己へのこだわりを超え、他者への温かいまなざしを得る④子育てのなかでの制約によって成熟していくとしている。

<sup>1</sup> 柏木恵子 1994: 「親となる」ことの人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究 第5巻 第1号

<sup>2</sup> 原田正文 2006: 子育ての変貌と次世代育成支援 pp.186-189

<sup>3</sup> 鯨岡峻 2002: 「育てられる者から」から「育てる者へ」 日本放送出版協会

<sup>4</sup> 岩本純子 2008: 子育て支援の心理学 無藤隆、安藤智子編 有斐閣 pp.101-104

本調査は保育園に通う子どもの保護者が子育ての中で直面する困難さや葛藤をどのように乗り越え、「親としての成長」を遂げていったのかを保育園を卒園した保護者が子育て期を振り返り、語られた内容を分析することで明らかにすることを目的とした。

## I 調査の概要

### 1 調査の対象

卒園後 1～3 年の保護者を対象とした。対象者は、機縁法を用いて A 市の社会福祉法人立 B 保育園に承諾を得、該当する保護者を無作為抽出し、承諾を得た保護者 13 名である。保護者の希望により 5 名はグループインタビューの形式をとり 8 名は個別のインタビューを行った。

### 2 調査の方法

ひとり 1 時間半から 2 時間程度の半構造化面接法による調査を行った。保護者の語りを了解を得て録音し、逐語録としてまとめた。

### 3 調査の内容

以下の項目を質問した。(表 1)

表 1. 面接調査の質問項目

①	基本属性	保護者の氏名・年齢・性別・職業 子どもの性別・年齢・入園年齢をお聞かせ下さい。
②	子どもを育てるときに困った事	出産後、保育園入園後に育児の中で困ったことをお聞かせ下さい
③	その時どのようなことで乗り越えることができたか	困った時に助けになった事や人等を具体的にお聞かせ下さい (特に保育士の対応も含めて)
④	出産前につけておきたかった力について	親になる前につけておけばよかったと思う知識や技術はありますか、またそのような力はいつ学ぶと良かったかお聞かせ下さい
⑤	子育てをして自分自身についた力について	子育てを経験した今、自分を振り返ってこんな力がついたと感じている事をお聞かせ下さい
⑥	働く事の意味について	特にお母様に自分自身にとって働く事の意味や、良かった事、困った事をお聞かせ下さい

#### 4 調査の時期

2010年（平成22年）6月から2010年11月まで行った。

#### 5 倫理的配慮

調査協力を得た保育所、保護者は人権擁護やプライバシー保護の観点から、特定化を避け匿名化をした。面接を行う場合は必ず対象者から書面で承諾を得、倫理的配慮を行った。具体的には調査対象者には事前に本研究の目的及び趣旨について書面を活用して口頭説明を行い、承諾を得、同意書に記名していただいた。加えて、東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科倫理委員会に研究目的及び調査内容を申請し許可を得た。

## II 分析の方法

### 1 結果の分析手法

定性的コーディング法を用いて分析を行った。コード化の手順は、以下のとおりである。

- 1) インタビュー逐語の内容を一覧できる整理表を作成した。
- 2) 整理表を①子育ての困難さ、②望ましい養育力の構成要素、③子育てを通して獲得した力の三点に着目して読み返し、その文脈に沿ってコードを抽出した。
- 3) 2)において抽出したコードをその内容により、分類・整理し、サブカテゴリーとしてそれぞれに特徴を示すラベルをつけた。
- 4) 3)のサブカテゴリーをさらに意味する内容により一段抽象度をあげるよう、分類・整理を行い、カテゴリーとしてラベルをつけた。
- 5) 4)で見いだされたカテゴリー間の関係性を意識しながらその意味を読み取り、さらに一段抽象度をあげ、コアカテゴリーとしてラベルをつけた。

なお、後述の結果の分析においては、コアカテゴリーを【】、カテゴリーを《》、サブカテゴリーを<>と記述することとした。

上記の分析方法を用いなかった項目についてはその都度分析方法を記入した。

## III 調査及び分析の結果

### 1 対象者の基本属性（質問①）

対象者の希望でI, J, K, L, Mについてはグループインタビューとし、他は個別のインタビューを行った。対象者は主として子育てに当たっている者とし母親が12名、父親が1名であった。平均年齢は37才であり30代9名、40代4名であった。6名が常勤職としてフルタイムで働き、2名が自営業、5名がパート勤務であ

った。子どもの数は3人が2名、2人が9名、ひとりが2名であった。母子家庭が2名、父子家庭が1名であった。(表2) Mについてはは子どもは2名いるが離婚後長男1名を引き取って親権者として育てている。

表2. インタビュー対象者の属性

インタビュー の形式	男 女	年齢	職業	子ども の数	子どもの年齢	その他
個別	A 女	35	老人介護施設勤務	3	中1男・小3男・小1女	
個別	B 女	43	自営	3	高1男・中1男・小4男	
個別	C 女	40	看護婦	2	小4女・小1男	
個別	D 女	36	教員	2	小4男・小1男	
個別	E 女	30	会社員(フルタイム)	2	小3女・小1男	母子家庭
個別	F 女	32	販売員(パート)	2	小3女・保育園年長女	
個別	G 女	42	県職員	2	小3男・保育園1歳児女	
個別	H 女	42	販売員(パート)	2	小3男・保育園年長女	
グループ	I 女	31	事務員(パート)	2	小4女・保育園年中女	
グループ	J 女	39	保育士(公立)	2	小4男・小1男	
グループ	K 女	37	事務員(パート)	2	小4男・小1女	
グループ	L 女	37	自営	1	小4女	母子家庭
グループ	M 男	39	自営	1*	小4男	父子家庭

## 2 乳幼児期の子育ての困難さ(質問②)の結果と分析

### 1) コード化の結果

養育の困難さについての逐語録から459項目を抽出し、106のサブカテゴリーに分類・整理した。さらにサブカテゴリーの抽象度をあげ、21のカテゴリーに集約した。その後さらに抽象度を上げ【子どもが生まれたとき(乳児期)の子育て】【幼児期の子育て】【第1子の場合】【第2子の場合】【第3子の場合】【保育園在園時の不安と困難性】【子育てと仕事の両立】【子育てのギャップ】のコアカテゴリーに集約した。さらにコアカテゴリーを以下のようにA、B、Cのグループに分類した。

A:【子どもが生まれた時(乳児期)の子育て】と【幼児期の子育て】のコアカテゴリーを集約し、『子どもの成長に伴って変化する子育ての困難さ』とした。

B:【第一子の場合】【第二子の場合】【第三子の場合】【保育園在園時の不安】【子育てと仕事の両立】の5つのコアカテゴリーを集約し、『子どもや親の生活状況や環境によって変化する子育ての困難さ』とした。

C :【子育てのギャップ】のコアカテゴリーを集約し、『子どもと対峙することで起こる子育ての困難さ』とした。

2) A『子どもの成長に伴って変化する子育ての困難さ』の分析

①妊娠出産時の状況について

第一子出産において、正常な妊娠及び普通分娩が13名中7名で他は何らかのトラブルを経験していた。不妊治療後に妊娠し普通分娩が1名(G)、出産時又は出産直後子どもに異常があり子どものみ入院した事例が3名(A、F、I)、妊娠中や出産時に母親に異常があった事例が4名であった(C、F、I、L)(表3)。

表3. 第一子の妊娠から出産に至るまでの状況

A	肺機能不全で産後子どもが3カ月入院
B	普通分娩
C	緊急帝王切開
D	普通分娩
E	普通分娩
F	逆子で帝王切開子どもは低体重児産後4週間入院
G	不妊治療の後普通分娩
H	普通分娩
I	切迫流産で産前1か月母が入院 超低体重児で子どもが産後3カ月入院
J	普通分娩
K	普通分娩
L	妊娠中毒症と切迫流産のため産前1か月入院
M(母親)	普通分娩

特に子どもに異常が見られた(A、F、I)については、育児についての注意事項が多く<健康管理に特別な配慮が必要で気が抜けなかった><おっぱいを毎日病院に届ける日々で寂しかった><初乳が上げられない><医療センターの医師と保健婦の調整に苦勞>といった養育の困難さが語られ、その後<小さくて心配で外に出したくない>等の育児不安につながっていた。特にAについては、実母も働き、退院後一人で子育てをしており育児不安や育児疲労感がおおきく、保育園に入園させることで育児から解放されたと語った。

このようなトラブルを抱えた妊娠出産後には特有な困難さがあると思われ<特別な出産>と分類し、【子どもが生まれた時(乳児期)の子育て】のコアカテゴリーに加えた。

## ②【子どもが生まれた時（乳児期）の子育て】の分析

第一子出産、退院後の自宅での子育ての様子を聞いた。退院後全員が実家に帰っている。しかし、滞在が3週間以内の保護者も多く（D、G、H、J、K）、一人での子育てを早くから行っていた。

19のサブカテゴリーを抽出し、「子どもについての漠然とした不安」「母親自身の状況や不安」「家族や社会の状況」「苦勞なし」のカテゴリーに集約した。①妊娠出産時の状況から「特別な出産」を加えて分析した（表4）。

表4. 子どもが生まれた時（乳児期）の子育て

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
子どもが生まれた時の子育て	子どもについて漠然とした不安	・子どものことが分からない
		・生活リズムが不安定
		・自分の子どもは育児書どおりにいかない
		・周りの子と比較して不安になる
		・世話しないと死に至るような危機感や緊張感
	母親自身の状況や不安	・子どものペースで振り回される
		・睡眠不足による疲れ
		・自分の体のいたわりができない
		・自分の状態把握ができない
		・世の中から取り残される感じ
		・頼れる大人がいない
		・話を聞いてくれる人や場所がほしい
	家族や社会の状況	・母の時代と育児方法の違いが摩擦になる
		・夫が育児に協力的ではない
		・夫の帰宅が遅く育児は手伝ってもらえない
		・不妊治療から育児について、周囲の人の協力が必要
	特別な出産	・健康管理に特別な配慮が必要で気が抜けなかった
		・おっぱいを毎日病院に届ける日々で寂しかった
		・初乳があげられずにさみしかった
		・小さくて心配で外に出したくない
		・医療センターの先生と保健婦の調整に苦勞
	苦勞ない	・子育ては楽しい
		・子どもはよく泣いたが気にならない
・子どもに手はかからなかった		

新生児は、睡眠のリズムが短く＜生活のリズムが不安定＞である。出生直後には、母親は、＜子どもの事が分からず＞育児書を参考にするが＜自分の子どもは育児書どおりにはいかない＞ことが多く、適切に＜世話しないと死にいたるような危機感や緊張感＞を漠然と抱きながら乳児と関わっていた（A、D、G）。また周囲の同年齢の＜子どもと比較して自分の子は遅れているのではないかと不安＞を感じやすいことも語られた。（A、B、F、G、H）新生児期の子どもと向き合う親のこうした傾向を《子どもについての漠然とした不安》とした。

次に、自分の生活のペースが＜子どものペースに振り回され＞授乳等により＜睡眠不足による疲れ＞の上に産後の＜体のいたわりができず＞心身ともに疲労が重なり、混乱して＜自分の状態が把握できない＞状態になったとほとんどの保護者が振り返った。（A、B、D、F、G、H、L）そうした追いつめられた状態で24時間乳児と過ごすことで＜世の中から取り残される＞閉塞感を感じ＜話を聞いてくれる人や場所が欲しい＞と希求している状況が語られた。また（B、C、I、J）は出産当初より実母が近くにおり、援助をしてもらっていた。相談に乗ってくれる＜頼れる大人＞の存在が身近にいるかどうかの困難さを乗り越える重要な要因であることもわかった。これらをまとめて《母親の状況》とした。

子育てをしている母親に対して＜母の時代と育児方法の違いが摩擦になる＞＜夫が育児に協力的でない＞＜夫の帰宅が遅く育児は手伝ってもらえない＞等の家族の協力体制や＜不妊治療から育児について周囲（特に職場）の協力が必要＞職場や冠婚葬祭などの付き合い等の＜社会的な付き合いが負担＞が母親にはストレスとなっていることがわかった。これらを《家族や社会の状況》とした。

一方、子育ての困難さを感じず＜子育ては楽しい＞＜子どもは泣いたが気にならなかった＞と子育てを楽しめた母親、＜子どもは手がかからなかった＞ので気にならなかった母親など、《苦勞ない》と答えた事例は（E、K）であった。（E）は出産直後から祖父母と同居し保育園入園後には子どもが熱を出した時には祖父母が預かる等育児の支援をしてもらっており、（K）についても実母と義理父母が保育園入園後も強力な支援をしていた。これらの事例から協力者の存在が重要であることが推測された。

### ③【幼児期の子育ての困難さ】の分析

《子どもの成長に合わせる》《家族の状況》の2つのカテゴリーが抽出された（表5）。

表 5. 幼児期の子育てについて

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
幼児期の子育て困難さ	子どもの成長に合わせる	・「子どもは自分の思い通りに行く」という思いでいたので思い通りにならないことで葛藤
		・自分の子どものイメージと違う自分の子どもを受け入れられない
		・なぜ他の子と同じようになれないか考える
		・やらせられることはなるべくさせる
		・一緒にいる時間が少ないので子どもとの時間を大切にす工夫
	家族の状況	・判断の基準を自分ひとりで決めなければならない不安(母子家庭)
		・夫がいないと煮詰まるかんじ
		・夫(父親)の役割が大きい
		・夫に子育ての情報を入れる
		・夫は忙しく育児に参加できない
		・夫なりに一生懸命だがペースが子どもと合わない
		・実母に熱のある子どもを置いていくなんと非難された
		・実母は世話になったが批判や文句も言われた
		・夫の父母が子どもに過干渉
		・夫の母がおおらかで子育ての考え方が違い助けられた

子どもが成長をしていくことで自我ができ、個性もはっきりとしてくる。親は今まで親の言うことに従順であった子どもが反抗したり、自分の意思を主張したりする行動をとるようになる時に強いストレスを感じていた。＜思い通りにならないことに葛藤＞＜自分の子どものイメージと違う子どもを受け入れられない＞＜なぜ他の子と同じようになれないか＞＜元気で活発な子どもがいい＞というような思いの中で葛藤をしている。一方＜一緒にいる時間が少ないので子どもとの時間を大切にす工夫＞にも心を配り、子どもが眠ってから家事を行うために睡眠不足を感じている事例もあった。これらをまとめて《子どもの成長に合わせる》とした。

次に仕事を持っている母親にとっては家族の協力、特に夫の協力が重要であると考えていた。＜夫の役割が大きい＞夫の協力が得られるように＜夫に子育ての情報を入れる＞、＜夫と話し合う＞等のことで子育てのストレスを分散している事が示唆された。その反面＜夫は忙しく育児に参加できない＞家庭もあり休日等に子どもと遊んでも＜夫なりに一生懸命だがペースが子どもと合わない＞ケースも見られた。インタビュー対象者すべての家庭は核家族であり母親と子どもだけではなく夫がいな



いと煮詰まる感じ>がありストレスになると感じていた。また、子どもが病気で父母が休みをとれない時には先のキーパーソンが保育をしてくれている家庭が多く子育て全般にわたって大きな力になっていることも明らかになった。その反面<実母に熱の子どもを置いていくなると非難された><実母は世話になったが批判や文句も言われた>というように相反する感情も抱いていた。夫の親に対しても<子どもに対して過干渉><夫の母がおおらかで子育ての考え方が違い助けられた>というように正負の気持ちが交差していた。これらをまとめて《家族の状況》とした。

### 3) B 『子どもや親の生活状況や環境によって変化する子育ての困難さ』の分析

子どもが家庭の中でどのような状況で生まれたか、子どもの保育園入園という子どもの生活状況や環境の変化で親の子育ての困難性は変化することが示唆された。また離婚や転職という親の生活状況の変化も直接に子育ての困難さに影響すると予想される。この項ではそのような状況の変化がどのような子育ての困難さを招くのか検討をする

#### ① 【第一子の子育て】【第二子の子育て】【第三子の子育て】の分析

子どもが生まれる順番で子育ての困難さが違った。以下のような分析をした(表6)。

表6. 第一子第二子第三子の子育てでの困難さ

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
第一子の子育て	母親の状況	・具体的な育児の仕方がわからない
		・基準がわからない不安
		・生まれてから保育園の時も今でも心配
		・第二子が生まれた時第一子の対応に困った
	家族の協力	・子育ての体制は実家で整っていたが夫婦はちぐはぐ
		・第一子は父親も非協力的(本人はがんばっているつもり)
	子どもの特徴	・保育園に慣れるまで時間がかかった
・おとなしく反抗しない		
第二子の子育て	母親の状況	・二人目だからわかっていると誤解される
		・育児を楽しむまではいかない
		・一人目より二人目のほうが大変(2歳差の子育て)
		・子ども二人の育児は精神的にも時間的にも体力的にもきつい(保育園入園まで)
		・第一子の育児が大変で第二子は構えない

		・第一子の手伝いやかわいさが励みになる
		・子どもの発達の先の見通しが持てる
	夫の協力	・第二子出産後夫が育児に参加
	子どもの特徴	・第二子の発達は順調（いつのまにか発達課題を超える）
		・保育園にもすぐに順応
		・手がかからない
		・困った覚えがない
	・自己主張が強い	
第三子の子育て	母親の状況	・基準が気にならない
		・子どもの個性の違いを楽しむ
		・育児を楽しめる
		・かわいいと思える

【第一子の子育て】の《母親の状況》では＜具体的な育児の仕方が分からない＞＜判断の基準が分からない不安＞を抱えて子育てし、子どもが大きくなって＜生まれてから保育園の時も今でも心配＞を感じている。又＜第二子が生まれても第一子の対応に困った＞と感じていた。《家族の協力》では家族特に夫は第一子の時ほどのような協力がいいのか分からず＜夫も非協力的＞でちぐはぐな対応＜子育ての対応は夫婦でちぐはぐ＞になってしまい母親のストレスが増幅していくことがうかがわれた。《子どもの特徴》として第一子は＜保育園に慣れるまで時間がかかる＞＜おとなしく反抗しない＞傾向があると認識していることが分かった。

【第二子の子育て】の《母親の状況》では第一子の時より＜子どもの発達の見通しが持てる＞が年齢差によっては＜第一子より第二子の子育ての方が大変＞＜子ども二人の子育ては精神的、時間的、体力的に第一子より大変＞と第一子を見ながらの子育ての困難さを認識している。そのため＜育児を楽しむまではいかない＞が＜第一子の手伝いやかわいさが励みになる＞とも認識していた。又第一子が出生時入院等で育児ができなかった事例では＜第二子だから分かっていると誤解される＞事で傷ついていた。《夫の協力》では、＜第二子出産後夫が育児に参加＞する事例が増えることが分かった。《子どもの特徴》では＜第二子の発達は順調＞＜保育園にもすぐに順応＞＜手がかからない＞＜困った覚えがない＞＜自己主張ができる＞と認識していた。

【第三子の子育て】の《母親の状況》では＜基準が気にならない＞＜子どもの個性の違いを楽しむ＞＜育児を楽しめる＞＜かわいいと思える＞と第三子では母親が

安定して子育てを楽しみ、あるがままの子どもを受け入れている様子が示唆された。

## ②【保育園在園時の不安】の分析

子どもの保育園への入園は初めての母子分離体験であり、保護者は不安を感じていることが語られた（表7）。

表7. 保育園在園時の不安

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
保育園在園時の不安	入園当初の不安	・ひとりでの保育に限界を感じて保育園に入れた
		・保育園になれず泣いていた【つらい思い】
		・保育園での子どもが心配（とくに第一子）
		・保育園のことを知らなかった（具体的におむつに名前を書くこととか）
	園生活の不応	・子どもが保育園で自分が出せないのではと心配
		・クラスの活動に参加できていない
		・友達ができない
		・クラスに溶け込めない
		・クラスの雰囲気が出来上がっているところへの入園は子どもが大変
		・子どもの家の姿と保育園での姿が違う

＜保育園に慣れずに子どもが泣いた＞＜保育園での子どもが心配＞というように入園当初に保護者は母子分離の不安を感じていた。また、保育園で子どもがどのように過ごすのか、欠席の時はどうするのか、毎日の準備等＜保育園を知らなかった＞ことで、不測の事態の対応や準備に追われ、体力的にも精神的にも困難さが増幅していくことにつながっていた。一方第一子において、子育ての協力者や理解者を得られず、＜一人での子育てに限界を感じて保育園に入れた＞というように切迫した事例もあった（A）。集約して《入園当初の不安》とした。

＜子どもが保育園で自分が出せないのではと心配＞＜クラス活動に参加できていない＞＜友達ができない＞＜子どもの家での姿と保育園での姿が違う＞というように保育園の生活に慣れてくると子どもが保育園でどのように過ごしているかを心配する姿があった。また、保育園は乳児から入園している子どもが多く、3歳、4歳からの入園では＜クラスの雰囲気が出来上がっているところへの入園は子どもが大変＞という心配もしている事が分かった。集約して《園生活への不応》とした

## ③【子育てと仕事の両立】の分析

子どもの保育園在園時には保育園に対する不安だけではなく子育てと仕事を両立するための困難さがあると予測できる。10のサブカテゴリーが抽出され、《子どもの病気》《制度の使いにくさ》《職場での困難さ》《家族の生活管理》の4つのカテゴリーに集約した（表8）。

表8. 子育てと仕事の両立

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
子育てと仕事の 両立	子どもの病気	・子どもが熱を出した時の手配
		・仕事が休めない時に子どもが熱を出す
	制度の使いにくさ	・病児保育や保育サポーターは手続きが面倒
		・制度の突発的な使用は子どもが慣れないので不安がある
		・介護休暇は制度としてあっても使えない（子どもの熱、夫の出張、祖父母の病気が重なった時が困った）
	職場での困難さ	・病気の時に職場に対する気遣い
		・定時に仕事を切り上げなくてはいけない
		・子育てと仕事の両立は体力的に大変
	家族の生活管理	・家族のスケジュールを確認しあう緊張感
		・子どもの健康状態を見ながら、次の日の段取りがたいへん

保育園在園児の保護者特に母親は＜子どもが熱を出した時の手配＞＜仕事が休めないときに子どもが熱を出す＞ように子どもが熱を出し、自分が仕事で休めない時に困難を感じていた。制度は整っているが＜病児保育や保育サポーターの制度は手続きが面倒で使いにくい＞＜突発的な使用は子どもが慣れないので不安がある＞＜介護休暇は制度としてあっても使えない＞と現実には使いにくいと感じていた。又、＜子どもが病気の時に職場に対する気遣い＞することもストレスになっていた。育児時間をもらっていても＜仕事を定時に切り上げなくてはいけない＞事、保育園に子どもを預けて子育ての責任は分散され、精神的には楽になっているが＜子育てと仕事の両立は体力的には大変＞と思っていることが分かった。又、普段には＜子どもの健康状態を見ながら次の日の段取りが大変＞＜家族のスケジュールを確認し合う緊張感＞を感じていることが示唆された。

## 4) C『子どもと対峙することで起こる困難さ』の分析

## ①【子育てのギャップ】の分析

現代の母親は子どもが身近にいる環境で育っていない。どちらかといえば過保護過干渉な環境で一生懸命勉強することがよいとされて育ってきた。今まで育った経済中心の価値観と現実の子育ての価値には大きな相違がある。このような「子育てのギャップ」に戸惑い精神的なバランスを取ろうとしている保護者の姿が示唆された（表9）。

表9. 子育てのギャップ

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
子育てのギャップ	育った価値観	・勉強を一生懸命しなさいと育てられた
		・家のことも兄弟の世話もしなくていいと育てられた
		・子どもを知らない
		・人間関係も気軽だけれど深くない
		・人に頼ったり迷惑をかけることをいけないことだと思っていた
		・みんなと違うことはダメなことと思ってきた
	現実の子育て	・自分の努力ではどうにもならない初めての経験
		・子どもと向き合えない
		・自分の足に子どもがまわりつくわずらわしさ
		・我慢もしていないのに急に我慢が必要
		・周囲の目も意識した【父子家庭】

現代の母親は「勉強を一生懸命しなさいと育てられた」「家の事も兄弟の世話もしなくていいと育てられた」「子どもを知らない」「人間関係も気軽だけれど深くはない」「人に頼り迷惑をかけることをいけないことだと思っていた」「みんなと違う事はダメな事だと思ってきた」というような価値観の中で育てられてきた。これらを集約して「育った価値観」とした。

しかし現実の子育ては「自分の努力ではどうにもならない初めての経験」であり、「我慢もしていないのに急に我慢が必要」な経験である。子どもを知らないので「自分の足に子どもがまわりつくわずらわしさ」を感じ「子どもと向き合えない（どう向き合ったらよいかわからない）」と自分が育った価値観を覆すような経験であった。さらに「周囲の目も意識」して親の役割をしなければならない。現実の子育ては初めての経験としてストレスを感じていることが語られた。これらを集約して「現実の子育て」とした。

### 3 困難さをどのように乗り越えたか（質問③）の結果と分析

インタビューイーは保育園利用者の保護者であることから困難さの克服には保育園の支援が多きな力になったことがすべての保護者から語られた。語りの中から、《子どもの成長》《協力者の支援》《親自身の努力》《情報》《保育園の対応》《保護者同士の連携》《保育園との連携》《理解・共感》の8つのカテゴリーに集約、さらに分析手法にのっとり【個人や家庭での克服】【保育園の支援】【子育ての連携】のコアカテゴリーに集約した。

#### 1) 【個人や家庭での克服】の分析

この項では3つのカテゴリーが抽出された（表10）。

表10. 個人や家庭での克服

出産後子どもとの新たな生活が始まった時<子どもの成長と共に睡眠時間が確保された><子どもが成長し反応を返してくる>ようになりかわいく感じるようになるように、子どもの成長とともに子どもとコミュニケーションが取れるようになったり生活が変化していったりすることで子育ての困難さがずっと続くわけではないことに気付いていくことが語られた。これらを《子どもの成長》と集約した。

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
個人や家庭での克服	子どもの成長	・子どもの成長とともに睡眠時間が確保された
		・子どもが成長し反応を返してくる（癒しパワー）
	協力者の支援	・同じアパートの子育て家庭と協力した
		・家族に強力な協力者（キーパーソン）が存在する
		・同じような人がいる事が分かる（インターネット等で探す）
		・父親（夫は）気持ちはあったがどのようにしてよいかわからない
	親自身の努力	・親として産んだ責任感
		・試行錯誤を繰り返しながら育児の方法を理解していった

B	実母
C	実母
D	実母
E	祖父母
F	実母
G	実父
H	アパートの友達
I	実母
J	実母
K	実母・義理父母
L	実母

＜家族に強力な協力者（キーパーソン）が存在した＞というように第一子出産から第二子、第三子の出産や子育て全般について母の実の母親が強力なキーパーソンとして母の子育ての支援をしていた。出産時子どもや母自身にトラブルがあった事例は勿論のこと（C、F、I、L）、普通分娩だが、第一子の子育てで強いストレスを感じていた保護者（B、D、G、J、K）にとっても子どもが保育園通園期間中の長期間にわたり母の子育てに重要な役割を果たしていたことが語られた。支援の具体的な内容は、実母が子どもに合った子育てのやり方を工夫したり、楽しそうに子育てをしている姿を見せたり（行動見本）、子育てのつ

らさを母から聞いてあげたり、また子どもが病気の時に預かってくれる等さまざまであった。

キーパーソンが得られなかった母親は、インターネットを使って＜同じような人がいることが分かる＞ことで自分一人ではないということを確認し子育ての不安やストレスを克服しようとしていた。また、＜同じアパートの子育て家庭と協力＞をしあって子育ての輪を広げていくような行動も起こしていた。

一方＜親として産んだ責任感＞＜試行錯誤を繰り返しながら育児の方法を理解していった＞というように母親自身の努力で克服をしていく事例もあった。この場合の子育ての不安感やストレスは非常に強く（A）保育園に入園させることで解放されたと語った。

家庭内では夫の協力を期待するが＜夫に気持ちはあったがどのようにして良いかわからない＞状態で夫の支援がなかなか受けられないことが、特に第一子の場合には前述【第一子の子育て】の項と一致する結果となった。

## 2) 【保育園の支援】の分析

《情報》と《保育園の対応》の2つのコアカテゴリーに集約された（表 12）。

表 12. 保育園の支援

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
保育園の支援	情報	・家庭以外から子育ての話が入る

	(園→保護者)	・自分の子育ての確認ができる
		・保育園での様子をたくさん、詳しく話してくれた
		・けがや事故についてはか詳しく説明してくれた
		・その子なりの成長を保育士から説明を受ける
		・保育園での様子がわからない(小さい時は本人が話さない)
		・保育参観では普段とは違う
		・若い先生は簡単な一言
	(保護者→園)	・他の子どもから情報が入った
		・自分の子どもの発達の確認
		・保育士は聞いて下さいと言ったが保育士に質問できない(入園当初)
	保育園の対応	・信頼関係を作る時間が重要(第二子からは聞ける)
		・生活リズムができる
		・子どもの生活体験が増える
		・先生が自分の子どもを認めているのが分かる
		・保育士さんが今の子どもの気持ちを尊重していた
		・子ども一人一人の気持ちを大切にされた保育
		・先生やお友達が大好き
		・行事とかでよくできてほめられて子どもなりに自信ができる
		・保育園はアットホームで安心
・安心して任せられる		
・保育園のような子どもと話し合う保育を夫が実践するが時間がかかり自分にはできないのでうらやましい		

《情報》では保育士から子どもの話を聞く機会ができ、＜家庭以外から子育ての話が入る＞ようになり、今まで確認できなかったが＜自分の子育ての確認ができる＞様になり、自分の子育てや子どもの発達が正常だと確認でき、保護者は安心しストレスから解放されていく事が示唆された。＜保育園での様子をたくさん、詳しく話してくれた＞＜怪我や事故について詳しく話してくれた＞事で保育園での子どもの状況を把握でき不安が解消されていくことも分かった。と同時に子どもが小さいときは子どもが保育園での様子を話せず、＜保育園での子どもの様子が分からない＞不安を感じていた。＜若い先生は簡単な一言＞で送迎時の説明が終わってしまい、



＜他の子どもから情報が入った＞というような不安の解決にならないような対応もあった。又特に子どもが小さいときは保育参観で子どもが母親にまわりつき、＜普段の子どもの状態とは違う＞という事も不安につながっていた。これらは園→保護者方向の情報である。

一方＜自分の子どもの発達についての質問＞を保育士に答えてもらうことで保護者の不安は軽減する。反面特に入園当初はこんな些細な事を聞いてもよいのかという思いから＜保育士は聞いて下さいと言われてたが質問できない＞状態もある事も語られた。保護者も＜信頼関係をつくる時間が必要＞と考えていた。しかし、身近に子育てについて質問したり相談したり行動見本としたりできる他者の存在は大きな支えになっていた。これらは保護者→園方向の情報である。

保育園に入園することで子どもは＜生活のリズムができた＞り、家庭ではできない＜生活体験が増える＞等変化していく。また＜先生が自分の子どもを認めているのが分かる＞＜今の子どもの気持ちを尊重していた＞＜子ども一人ひとりの気持ちを大切にした保育＞等保育士の言動が行動見本となって子どもとの関わり方を修正している姿が見られた。保育を通して子どもが＜先生や友達を大好き＞になり＜行事でよくできて褒められ子どもなりに自信ができる＞と子どもの発達が保護者に実感されていくことで、＜保育園はアットホームで安心＞＜安心して任せられた＞という保育園への信頼が保護者の不安を解消していく事も示唆された。一方保育士のように＜子どもと話し合う保育を夫が実践するがそれは時間がかかり忙しい自分にはなかなかできず、うらやましい＞という気持ちを持っていることも分かった。

### 3) 【子育ての連携】の分析

保育園入園を機会に子どもと保護者双方の生活が広がっていく。保護者は《保護者同士の連携》《保育園との連携》を通して、相互に子育ての《共感・理解》を深めていた（表 13）。

表 13. 子育ての連携

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
子育ての連携	保護者同士の連携	・母の友達ができる
		・友達に相談や話を聞いてもらう
		・自分の子どもの話で共通に話せる
	保育園との連携	・連携は励みになった
		・具体的な育児をしてもらう【排泄、離乳】
		・みんなで子育てしている感じで責任も分散していた

		・そのなかで母の役割【甘えさせる】
	理解・共感	・子どもと二人きりではないという思い
		・子育ての大変さを保育士が理解共感してくれる

保護者は保育園に子どもを入れることで＜母の友達ができる＞＜友達に相談や話を聞いてもらう＞＜保護者懇談会で他の親の子育ての話が聞ける＞等子どもだけではなく保護者自身の友達が出来ていた。また、母の友達ができることで＜子どもの話で共通に話せる＞場を獲得していくこともうかがわれた。少子化の社会は子どもについての話がなかなかできにくい社会でもある事が示唆された。

送迎時に＜子育ての大変さを保育士が理解し共感してくれる＞ことで自分は＜子どもと二人きりではないという思い＞を感じていることが保護者の気持ちの安定につながっていた。

母親は保育園に子どもを預けることで＜皆で子育てをしている感じで責任も分散していた＞と理解し、その中で保育園には＜具体的な子どもの保育＞を母である自分は＜母の役割（甘えさせる）＞をしていると感じていた。そのような＜連携は励みになった＞と思い、＜専業主婦よりは精神的には楽だったかも＞しれないと思っ  
ていることが語られた。

#### 4 出産前につけておきたかった力（質問④）の結果と分析

出産前にどのような学びをしていたか、それは役に立ったかというインタビュー内容での質問となった。【学びの不確かさ】【親になる学びの工夫】の2つのコアカテゴリーが抽出された（表14）。

表14. 子どもが生まれる前の学び

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
学びの不確かさ	出産前の学び	・具体的な育児の方法は介護や看護の仕事から学んだ
		・見よう見まね
		・育児書を読んだ
		・姪や甥の世話をした
		・保育士資格取得時の勉強
	実際の子育て	・実際の子どもは育児書や教科書とは違い役に立たない
		・24時間一緒に別なつらさがある
		・自分の持っている子どものイメージが違った
		・姪や甥は自分の子どもとは違った

		・姪や甥の世話はそれなりに役に立った
親になる学びの工夫	学びの機会	・母親学級は時間が合わない
	これから親になる人への学び	・不妊治療の話
		・母親の育児体験
		・子どもが授かることは奇跡的な事
		・実際の子育て体験

＜具体的な育児の方法は介護や看護の仕事から学んだ＞＜見よう見まね＞＜育児書を読んだ＞＜姪や甥の世話をした＞＜保育士資格取得時の勉強＞のサブカテゴリーを集約して《出産前の学び》とした。このような学びが実際の子育てで活かされたかについて＜実際の子どもは育児書や教科書とは違い役に立たない＞＜24時間一緒は別なつらさがある＞＜自分の持っている子どものイメージが違った＞＜姪や甥は自分の子とは違った＞と大半の保護者が《実際の子育て》とのギャップを感じていた。一方で＜姪や甥の世話はそれなりに役に立った＞と感じている（F）例も数少ないが見られた。座学ではなく実際に子どもと関わる経験は役に立つのではないかと考えられた。集約して《実際の子育て》というカテゴリーとした。二つのカテゴリーを集約して【学びの不確実さ】というコアカテゴリーとした。

仕事を持っているため＜母親学級は時間が合わない＞為に学ぶ機会が確保されない事例が多くあった。《学ぶ機会》というカテゴリーとした。＜不妊治療の話＞＜母親の育児体験＞＜子どもが授かることは奇跡的な事＞＜実際の子育て体験＞等理論的な学びより具体的で実践的な学びが役に立つと考えていた。集約して《これから親になる人への学び》とした。2つのカテゴリーを集約して【親になる学びの工夫】とした。

## 5 子育てをしてみた力について（質問⑤）の結果と分析

インタビューから46のサブカテゴリーを抽出し、【子ども理解】【保育力】【自己認識】【社会と関わる力】【社会認識】の5つのコアカテゴリーに集約した（表15）。

表 15. 子育てでついた力

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
子ども理解	子どもの観察力	・乳幼児期に親がどのような気持ちで育てたかは子どもの性格に反映する
		・親が一番大変だと思っていた時期が子どもにとって一番大事な時期でもある

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもにとって保育園の時代が今(小学校)の生活の土台になっている</li> <li>・子どもたちは学校で何かあった時、お互い助け合う</li> </ul>	
	発達を理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今あげなければいけない栄養を今あげなければ子どもが苦勞する</li> <li>・保育園で問題を起こすことが順調な発達と思う</li> <li>・子どもの大概のことは時期が来れば解決する</li> </ul>	
	人権の尊重	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもそれぞれの特徴を見極めて子どもの可能性を広げる方法を付き合いながら分かってきた</li> <li>・みんなと違うと遅れているんじゃないかと思ってきたけど一人一人は違う</li> <li>・子ども一人ひとりの違いを楽しむ</li> <li>・子どもの気持ちを尊重する</li> <li>・子どもは子どもだし自分は自分</li> </ul>	
保育力	基本の力	忍耐力	
	接し方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し待つ(子どものペースに合わせる)</li> <li>・子どもがいながらいろんなことできる</li> <li>・子どもが思うとおりにしてもいいと思うことができる</li> <li>・子どもの特徴に合わせた関わり方を考えるようになった</li> </ul>	
		状況の受け入れ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・細かいことは気にしない</li> <li>・出来ないものは後回しにする</li> </ul>
自己認識	親の自覚	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の子どもの親として成長する</li> <li>・親としての責任がある(産んだ責任)</li> </ul>	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・優しくなった(職場の人にも言われる)</li> <li>・人の気持ちをかんがえるようになった</li> <li>・子どものためなら何でもできるという思い</li> <li>・自己主張するようになった</li> <li>・自分に自信がついた(自己肯定観)</li> </ul>	
社会と関わる力	関わり方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それまではマイナス思考</li> <li>・子どもが生まれるまでこんな小さなこと気にしていた</li> </ul>	
	共に生きる実感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分ひとりで生きているんじゃないということが分かった</li> </ul>	

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・人に頼ったり迷惑をかけることをいけないことだと思っていたが頼っていいんだと思う</li> <li>・分からないことは分からないということができる</li> </ul>		
社会認識	家庭運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭の運営</li> <li>・夫との付き合い方</li> <li>・家庭運営の方法を家族で話し合い、自分の方針を修正していく</li> <li>・条件を作ったり、言い方を変えたりして工夫</li> </ul>		
		次世代育成観	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今度は若い人を応援しようと思う</li> <li>・行政にいるから少しでも保育園を応援したい</li> <li>・じぶんが思っていること、夫が思っていることを子どもに伝えていきたい</li> </ul>	
			認識の仕方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思うようにいかないことがあり、それをあきらめる力</li> </ul>

#### 1) 【子ども理解】の分析

この項は《子どもの観察力》《発達の理解》《人権の尊重》の3つのカテゴリーが抽出された。

＜保育園での生活が小学校生活の基礎になる＞事、＜乳幼児期の親の姿勢が子どもの性格に反映される＞事、＜学校に入っても子ども同士助け合っている＞事等子どもに対して観察を通して、子どもとの関わり方や子育ての姿勢について、より深い学びをしていた。

＜今あげなければいけない栄養を今あげなければ子どもが苦勞する＞と言うように愛情や対応には適時性がある事、＜保育園で問題を起こすことが順調な発達と思う＞＜子どもの大概のことは時期が来れば解決する＞等大人から見るとマイナスと考えられる子どものトラブルは必ずしも悪いことではなくむしろ順調な発達の過程であるという学び、子どもの心配事やトラブルは子どもの発達と共に現れそして解決していく事を体験的に学んでいた。

子どもに対する固定的なイメージから解放され、＜みんなと違うと遅れているんじゃないかと思ってきたけど一人一人は違う＞ことに気づき、＜子ども一人ひとりの違いを楽しむ＞＜子どもそれぞれの特徴を見極めて子どもの可能性を広げる方法を付き合いながら分かってきた＞ようにその違いを楽しむようになり、一人一人に合わせた対応ができるようになり、それが＜子どもの気持ちを尊重する＞ことであることを学んでいた。このような学びは＜子どもは子どもだし自分は自分＞というように、子ども自身にもそれぞれに固有の気持ちがありその気持ちをひとりの人

間として尊重することの重要性の理解につながっていた。また、精神的な母子分離が幼児期には始まっていることも分かった。

## 2) 【保育力】の分析

《基本の力》《接し方》《状況の受け入れ》の3つのカテゴリーが抽出された。

子どもはまだ意思がよく伝わらず、親の思うようにはいかないことが多く、子どもとじっくり付き合うことで＜忍耐力＞がついたと多くの保護者が考えていた。

子どもとの《接し方》では＜子どもがいながらいろんなことができる＞＜子どものペースに合わせて少し待つ＞等子どもと生活を共にしながらいろいろなことをやる工夫や楽しさを見つけ、子どもと共存していく力をつけていた。＜子どもの特徴に合わせた関わり方を考えるようになった＞＜子どもが思うようにしていいと思う＞という学びにもあるように、保護者には親子関係について子どもは親の言うことを聞くのが良い事というイメージを持っており、子どもは一人の人間だから子どもの思うことをしていいという子どもを対等な人格として考えや対応ができるようになっていたことが示唆された。

十分な時間や精神的な余裕がない中での子育てを通して、優先順位を付けて家事育児をしている様子が語られた。そのような生活を通して、＜細かいことは気にしない＞＜できないものは後回しにする＞というように完璧さを求めず、曖昧さや柔軟さに耐えていく力を獲得していた。これは保護者にとっては今まで生きてきた価値観の大きな変更であったと思われる。

## 3) 【自己認識】の分析

《親としての力》《自己変革》2つのカテゴリーが抽出された。

一般的概念的な親としてではなく、目の前にいる自分自身の子どもの＜親としての責任＞を強く自覚し、＜自分自身の子どもの親として成長した＞自分を意識していた。その内容は＜優しくなった＞＜人に気持ちを考えるようになった＞＜自己主張するようになった＞＜自分に自信がついた＞等具体的に語られた。

## 4) 【社会と関わる力】の分析

《関わり方》《ともに生きる実感》の2つのカテゴリーが抽出された。

保護者は自分自身を＜子育てをする前はマイナス思考＞だった、＜子どもが生まれるまではこんな小さなことを気にしていたのだと＞振り返り、子育てを通して、小さいことは気にしないで前向きに考えていくようになったと語った。

また、今まで、学校や家庭では「人に迷惑はかけてはいけない」と言われて育っ

てきたが、保育園、祖父母、職場の上司や同僚等様々な人の援助を受けて子育てができたという思いが強く、人生には自分一人ではできないことがあり、〈人に頼ったり、迷惑をかけることをいけないことだと思っていたが頼っていいんだと思う〉〈分からないことは分からないということができる〉と思えるようになったと多くの保護者が感じていた。そして、〈自分ひとりで生きているのではない〉と他者の存在を実感し、多くの人と助け合って生きていくということを経験的に学んでいた。

#### 5) 【社会認識】の分析

ここでは《家庭運営》《次世代育成観》《認識の仕方》の3つのカテゴリーが抽出された。

子育てと仕事の両立の項で保護者は子どもの健康状態を確認しながら翌日の各自のスケジュールを立てていくことの困難さが抽出された。また、父親は第一子の時は具体的な協力が何をしてもよいかかわからずできない状況もうかがわれたが、第二子からは子育てや家庭運営に参加することも子育ての困難さのこうで抽出された。毎日のこのような経験の繰り返して保護者は〈家庭運営の方法を家族で話し合い、方針を修正していく〉家族で運営の方法を決定するという民主的な家庭運営を行っていた。《次世代育成観》では自分のこどもに対して自分や夫が考えていることを伝えていくことの大切さに気付き、自分以外の人たちが成長したり子育てをしたりする時に貢献していこうという気持ちが育っていた。また、人生には自分の思うようにはいかないことがあるということにも気付き、あきらめたり折り合いをつけたりしていく力も必要であると認識していた。《認識の仕方》とした。

#### 6 働く意味（質問⑥）についての結果と分析

22のサブカテゴリーが抽出され【意義を持って働く】【働くことは自然体】【子どもとの関係で働く】【働く事の困難さ】の4つのコアカテゴリーに集約された(表16)。

表 16. 働くことについて

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
意義を持って働く	自己実現	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の人生を持っていたい</li> <li>・自分の好きな仕事なので続けたい</li> <li>・自分の世界が広がる</li> </ul>
	社会的な意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が認められていると思える</li> <li>・職場の中で責任ある立場になってきた</li> <li>・責任ある仕事はやりがいがある</li> </ul>

	経済的意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活のため、当たり前のこと</li> <li>・生活の質は落とせない</li> </ul>
働くことは 自然体	生活の一部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意味とか考えたことはない</li> <li>・母親が働いていたので働くのは当たり前と思う</li> <li>・みんな制度を使って頑張るんだと思っていた</li> </ul>
子どもとの関係	子育てからの解放	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働かなければ家と子どもの事だけの世界しかない</li> <li>・仕事の間子どもの体調等は気になるが、解放された気分</li> <li>・身体は疲れるが精神的には楽</li> <li>・仕事がないとノイローゼなるかもしれない</li> </ul>
	教育的意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親が働くところを見せておきたい</li> </ul>
働くことの 困難さ	子どもに対する思い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育園に預けて働くことに後ろめたさを感じる時がある</li> <li>・子どもに対しては自分のエゴではないかと思うことがある</li> <li>・特に子どもの体調が悪い時申し訳ないと思う</li> </ul>
	両立の困難	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事との両立が大変</li> <li>・働きながらのキャリアアップは大変</li> <li>・キャリアアップをあきらめる</li> </ul>

多くの保護者が働くことについて＜自分の人生を持っていたい＞＜自分の世界が広がる＞＜自分の好きな仕事なので続けたい＞と自分自身の《自己実現》、＜自分が認められていると感じられる喜び＞＜職場の中で席になる立場になった＞＜責任ある仕事はやりがいがある＞と《社会的な意義》、＜生活のため当たり前＞＜生活の質を落とさない＞という《経済的な意義》を認識していた。これらを【意義を持って働く】とした。

＜母親が働く姿を見てきたので自分も当然そうなるのだ＞と思い、＜意味とかを考えたことはない＞、育児のための制度が整う中で＜みんな制度を使って頑張るんだ＞と、働くことは《生活の一部》であり当然と思っている保護者も見られた（B、C、G）。【働くことは自然体】と集約した。

＜働かなければ家と子どものことだけしか世界がない＞＜子どものことは気になるが解放された気分＞＜体は疲れるが精神的には楽＞＜仕事がないとノイローゼになるかもしれない＞というように働くことで子どもと距離を保ち、精神的に《子育てから解放》されるとも認識していた（A、C、H、I、J、K）。＜親が働く姿を見せ



ておく>ことは子どもが働くことが身近に感じられ、大人になったら当然自分もはたらくと考えるのではないかという《教育的配慮》も考えていた（G、K）。

しかし一方で、子どもに対しては<預けて働くことに後ろめたさ>を感じたり、<特に子どもが病気の時には自分のエゴではないか>という思いを持ったりしていることも語られ、複雑な《子どもに対する思い》を持っていることも示唆された。と同時に、仕事との両立はやはり<大変>であり、特に子育てをしながらのキャリアアップは大変で<キャリアアップのチャンスがあったがあきらめた>ケースもあった（A、C、D）。《両立の困難》と集約した。

#### IV 調査結果の考察

##### 1 保護者が認識する子育ての困難さ

1) 本調査では保護者は乳幼児期の子育ての困難さを以下の状況で起きたと認識していた（表 17）。

表 17. 保護者が認識する子育ての困難さ

子どもの成長	① 周産期（妊娠から出産） ② 乳児期（出産直後から子どもに表情が出る頃） ③ 幼児期（自己主張が出る頃）
親や子どもの環境の変化	① 第一子・第二子・第三子の子育て ② 保育園入園と在園時の子育て（母子分離の時期） ③ 子育てと仕事の両立
子どもとの対峙	① 子育てのギャップ

2) 周産期には第一子において対象者の半数近くの母親がなんらかのトラブルを経験していた。特に子どもにトラブルがあった母親は子どもについての不安や心配を強く感じており、このような母親に対しての的確な支援の必要性が示唆された。

3) 乳児期の子育てについては出産直後特に睡眠不足や産後の疲労に加えて子どもがまったく分からないこと、育児書通りに自分の子育てはいかないことに戸惑い困難さを感じていた。加えてこのような子育ての不安や負担感を共有する人や場所がないことに困難さを感じていた。

4) 幼児期には子どもの個性がはっきりし、愛着関係を基盤に子どもの自立欲求が顕著になる。それまでは親が全責任を持って子どもを保護し、子どもは親の言

うことを聞くことが当たり前と思っていたのに、急に子どもが反抗的になり自分の言うことを聞かなくなることにストレスを感じていた。子どもの自分でやりたい思いは時として母親の社会的な価値観と相反することがあり、それが親子の関係を行き詰らせていた。また、「元気のよいはつらつとしたこども像」を持っていた保護者が多く自分の子どもがイメージから少しでも外れるとちゃんと発育していないのではないかと不安を感じ、そのようなわが子を受け入れられず葛藤していた。

- 5) 保護者は第一子の子育てには生まれた時から大きな困難さを感じており、その不安や心配は形を変えて小学生になっても続いていた。それに反して第二子は出産時に第一子第二子一緒の世話が精神的、時間的、体力的に負担が増え大変さを感じていたが、第二子との親子関係や発達については心配や不安は感じていなかった。特に第三子に至っては発達の基準も気にならず子どもの個性を楽しんで子育てをしていた。
- 6) 保育園入園及び在園時は保護者が保育園のことや保育園での子どもの様子を知らないことからくる困難さが推測された。保育園側からの細部にわたる適切な情報や支援の工夫の必要性が示唆された。
- 7) 子育てと仕事の両立については、子どもが熟を出した時の調整、家族の時間的調整、子どもとの時間の確保、職場への配慮等容易ではなく、特にフルタイムで常勤職として働いている保護者(母親)は体力的に大変であると感じていた。(5名中5名)と同時に職場で責任ある仕事を期待される時期になり、また子育てのためキャリアアップのチャンスをあきらめざるを得ない状況も経験した保護者もいた。
- 8) この時期の子育て家庭は離婚、転職や転勤、妊娠や出産、子どもや祖父母の病気等で家族構成や状況が変化しやすく、このような状況の変化で困難性が増すことが分かった。保育所在園児の保護者は保育園に入園した時点で子育てと仕事の困難性を抱えており、そこに子どもの成長、親や子どもの環境の変化、子どもとの対峙とともに現れる困難性が重複することが常態となっていると考えられ、すぐに特別な支援が必要な保護者となることが推測される。誰でもが特別になりうるということであろう。薄氷の上を歩くような状況の中で子育てをしているといっても過言ではない。これは日常的な声かけや伝達という保護者との会話の中で、困難性の重複という保護者の状況の早期の発見と予防的な対処が重要である。
- 9) 保護者は「家の手伝いはしなくてもよいから一生懸命勉強をするよう」に、「能力を生かして自己実現するよう」にと育てられたと語っている。家庭も学校も

仕事も自分のペースで回ることがあたりまえと思って生きてきたといっても過言ではない。しかし現実の子育ては、子どものペースに合わせていく作業であり、あいまいで答えがはっきり出るものではない。保護者が育ってきた効率と結果を重んじる経済中心の社会とは全く価値観が違うのである。保護者は子ども・子育ての価値観と現代社会の経済中心の価値観とのギャップに大きな戸惑いを感じていた。社会全体で子育てを応援するというはこのギャップについての理解と寛容さが重要であろう。

## 2 どのように困難さを乗り越えたか

- 1) 第一子出産から保育園卒園まで子育ての協力者の存在が重要な役割をはたしていた。協力者については母の実母が多かったが、母の父親、母の祖父母、義理の父母、同じアパートの友人等多様な人達がいた。協力者とは子育てのやり方や母親が働くことについて意見が合わず嫌な思いをすることもあったが子育てにおいての手助けに感謝していた。協力者が見つけられない時の保護者には大きなストレスがかかっていた。夫は第一子の子育てでは協力的ではなく、第二子以降家事育児等の家庭運営に積極的に参加し始め、夫の存在は大きな助けになっていた。
- 2) 子どもが保育園に通園することで、保護者は保育士だけではなく他の保護者や子ども達と関わり、子どもを中心とした世界を広げていく。子ども中心にした世界は保護者にとっては新しい世界で、子どものことを気兼ねなく話せる場所ができたと感じていた。その中で自分の子育てや子どもの成長の確認をし、いろいろな子どもがいること等に気づき、子育ての相談、保育士や先輩保護者から行動見本や子どもの見方等を学ぶことで自分自身の学びとし子育ての困難さを乗り越えていた。
- 3) 保護者は保育士が保育園での子どもの様子や怪我や体調等を短い時間に的確に話してくれることで保育園への信頼を高め、安心して子どもの保育をお願いできたと語った。一方若い保育士等で子どものことがよく伝割らないと不安が募ったとも語った。子どもの様子や子どもに対する見方を的確に伝える力が保護者支援にあたって保育士に求められる力の一つであると思われる。
- 4) 保護者は保育園に子どもを預けることで皆で子育てをし、責任も分散していたと感じていた。子育てと仕事の両立は体力的、時間的に大変こともたくさんあったが、精神的に支えられたと感じていた。多くの人が子育てに関わることで支援になっていた。

## 3 子育てでついた力

- 1) 保護者は子育てという経験を通して以下の力がついたと自覚していた
- ①子どもについての心配事は子どもの発達とともに現れ解決していくのだというよ  
うな」発達についてのとらえ方、子どもの今の状況を観察する力、子どもを一人  
の人間としてその個性を尊重していく事等子ども理解の力
  - ②こどものペースにあわせて待つ事や子どもの希望を優先していく事等、状況に合  
わせて自分の生活を柔軟に変化させて子どもと付き合っていく保育力
  - ③親としての責任感が増し、他者の立場や気持ちを考えるようになり、優しくなっ  
た、自己主張するようになった等自分自身が変わったという認識
  - ④他者に迷惑をかけないように、みんなと同じようにという価値観の中で生きてき  
たが、お互いに助け合って生きていく事、自分の思うようにいかないことがあり、  
それをあきらめていく事等他者や社会に対して妥協してバランスを取っていく  
力
  - ⑤自分が子育てで多くの方に助けてもらったので今度は若い母親を応援したいと思  
うし、子どもを見た時は声をかけ暖かく見守る等他者に対する興味や関心
  - ⑥夫と協力しての子育てを通して家事や子育てを分担したりするのに、夫と話し合  
う等民主的な方法で家庭運営をする力

2) 「保護者が子育てを通してついたと認識している力」と「保育士が認識する養育力」<sup>5</sup>を比較した。同じ質問内容ではないため、微妙な思いやニュアンスの違いがあると考えられる。しかし、保育士が親としての成長をどのように支援できるのかという視点から両者を比較することに意味があると考えた（表 18）。

○印、△印はサブカテゴリーに違う項目が含まれるが一部で一致している項目である。青の行は保育士のみ必要と考えている項目、ピンクの行は保護者のみ成長したと認識している項目である。「保育士が認識する養育力<sup>6</sup>」では保育士が認識する養育力の5項目のうち【保育力】が41,5%、【子ども理解】【社会とかかわる力】がともに18,6%であった。保育士は「子ども理解」「保育力」と「社会とかかわる力」特に<持続力><理解力><想像力><判断力>等を養育力の構成要素として重きを置いていることが推測された。それに対し、保護者は「今できないことは後です」「自分の思うようにいかないことがある」というように状況を受け入れ、社会の枠組みを柔軟に考え、さらに「次世代育成感」等より社会とのかわりに目を向け、社会に開かれた学びをしていることが示唆された。両者の

<sup>5</sup>木村たか子「保育士が認識する養育力の概念と保護者の養育力向上に資する保育士の支援」7-1)-(2)表  
16: 関東短期大学紀要第5集 P73 P56~P61

<sup>6</sup>木村たか子「保育士が認識する養育力の概念と保護者の養育力向上に資する保育士の支援」7-1)-(2)表  
16: 関東短期大学紀要第5集 P73 P56~P61

違いから「親としての成長」に資するための保育士としての支援を考えるときに、地域や社会に開かれた視点が必要ではないかと考える。

表 18. 「保護者が子育てを通してつuitたと認識する力」と「保育士が考える養育力」の比較

コアカテゴリー	カテゴリー	保育士	保護者
子ども理解	愛情	○	
	子どもの興味（知識・理解・観察）	△	△
	子どもの人権尊重	○	○
保育力	基本の力（忍耐力）	○	○
	接し方（見守り・共感）（待つ）	△	△
	状況の受け入れ		○
親の自己認識	親である自覚（責任）	○	○
	親の自己認識（自己肯定観）	△	△
社会と関わる力	基本の力	○	
	関わり方（前向き・助けを求める）	○	○
社会認識	家庭運営	○	○
	認識の仕方		○
	次世代育成感		○

## V 課題

保護者の視点から「親としての成長」の概要を明らかにすることができたと考えられる。今後「子育てを通してつuitた力」の構成要素について内容の妥当性の検討を行い、「親としての成長」を支える保育士の具体的な支援の方法を調査したい。

## 引用文献

- 柏木恵子 1994：「親となる」ことの人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究第5巻 第1号  
 原田正文 2006：子育ての変貌と次世代育成支援 P186-P189  
 鯨岡峻 2002：「育てられる者から」から「育てる者へ」日本放送出版協会  
 岩本純子 2008：子育て支援の心理学 無藤隆、安藤智子編 有斐閣 P101-P110  
 木村たか子「保育士が認識する養育力の概念と保護者の養育力向上に資する保育士の支援」7-1)-(2)表 16:関東短期大学紀要第5集 P73 P56~P61

## 参考文献

- 藪野優子「親性準備性」概念の再検討 ヒューマンサイエンス N012 2009  
 伊藤葉子「関係性の中で親性準備性を育てる」 特集家族と保育一家族は変わった  
 柏木恵子「発達心理学からみた母性・父性」 コロナ社 2009  
 原ひろ子「次世代育成力一類としての課題」 1991 新曜社  
 深谷和子 三枝恵子「親になること」 家庭科教育 69巻13号 家政教育社 1995.  
 東洋 柏木恵子「社会と家族の心理学」ミネルヴァ書房 1998  
 柏女霊峰 橋本真紀「保育者の保護者支援」フレーベル館 2008  
 大日向雅美「子育て支援が親をダメにするなんて言わせない」岩波書店 2005  
 発達 NO120 .VOL30 ミネルヴァ書房 2009.10月  
 発達 NO118 VOL30 ミネルヴァ書房 2009.4月  
 宮原忍 斎藤幸子他「少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究」第一報 日本子ども家庭研究所紀要 第38集 2002  
 宮原忍 斎藤幸子他「少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究」第一報 日本子ども家庭研究所紀要 第39集 2003  
 宮原忍 斎藤幸子他「少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究」第一報 日本子ども家庭研究所紀要 第40集 2004  
 宮原忍 斎藤幸子他「乳幼児を持つ保護者の養育力と育児観に関する調査」日本子ども家庭研究所紀要 第42集 2006  
 宮原忍 斎藤幸子他「少子社会における養育力の背景とその育成に関する研究」子ども家庭研究所紀要 第43集 2007  
 宮原忍 斎藤幸子他「少子社会における養育力の背景とその育成に関する研究」子ども家庭研究所紀要 第44集 2008